

2022年12月18日（日）主日朝礼拝説教

『その名はインマヌエル』井上隆晶牧師  
イザヤ書9章1～6節、マタイ福音書1章18～25節

### ①【ひそかに縁を切る決心】

イエス様の降誕物語はマタイとルカだけが書いています。ルカ福音書には天使ガブリエルによる「マリアへの受胎告知」が書かれていますが、マタイ福音書では夢の中で現れた天使による「ヨセフへの受胎告知」が書かれています。マタイはヨセフを中心に書いています。そこで今日はこのヨセフの上に起こったクリスマスの出来事の話をしていきます。

「母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。」(18～20節)  
ここでは夫ヨセフと書いていますが、二人はまだ婚約中でした。しかし当時の習慣では婚約中であっても、すでに法的には「夫婦」とみなされました。ヨセフは正しい人であったとあります。聖書で「正しい人」というのは神を信じる人のことです。ヨセフは神を信じる人でした。そんなヨセフに婚約者であるマリアが聖霊によって身ごもったことが知らされます。この「聖霊によって身ごもっていることが明らかになった」という文章が難しいのです。フランシスコ会訳は「聖霊によってみごもっていることが分かった」と訳しています。英語では「found(discovered)」という単語が使われています。マリアが天使のお告げを伝えたのかもしれませんが、ヨセフは何を悩んだのでしょうか。①「聖霊により身ごもったのか、それとも姦淫によるものなのか」を悩んだのでしょうか。それとも②「聖霊によって身ごもったことを信じたが、そんな神に選ばれた人の夫になることを悩んだ」のでしょうか。カトリックのフランシスコ会訳の注解をみると、「聖霊によって懐胎したマリアをどう扱ってよいか分からずにいたヨセフは、夢の中で神からイエス様の法的な父親であり、名づけ親になって欲しいと言われた。」と説明していますから、②の解釈になります。プロテスタントは①が多いです。本当はどうなのか分かりませんが、でも悩んだあげく彼が出した答えは「表ざたにしないで、ひそかに縁を切る」というものでした。いくら正しい信仰の人でも「ひそかに縁を切る」ことが、彼が決めた最善策だったのです。

●降誕祭のイコンを見ると、下の段の左端で、ヨセフが曲がった杖をついた老人の羊飼いに何かを言われている絵が描かれています。これは「処女が子供を産むはずがない」という言葉を聞いて、ヨセフが迷っている姿なのです。曲がった杖をついた老人の羊飼いは偽の預言者、または悪魔を象徴しています。曲がった杖は、曲がった教えを象徴しています。

## ②【ヨセフに前に向かう決心をさせるもの】

離縁（離婚と同じ）の決心をしたヨセフに、その夜、天使が夢に現れてこう言いました。「**ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。**」(20～21 節)

夢というのは当時「**神のお告げ**」の手段でした。この後、いつもヨセフには夢の中で神の言葉は告げられます。夢とヨセフと聞くと何か思い出しませんか？創世記の中に出て来る「**夢を解くエジプトのヨセフ**」です。マタイ福音書はユダヤ人に向けて書かれています。ユダヤ人はこれを読んだ時、エジプトのヨセフを思い出したはずですが、夢を解いたヨセフのように、夢での神のお告げをしっかりと信じた新しいヨセフに倣って、あなたも神の言葉を信じなさいと勧めているようです。ヨセフは「**眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ**」(24 節)しました。「**眠る**」というのはよく不信仰の象徴として使われる言葉です。聖書で「**目を覚ましていなさい**」というのは神の言葉を信じなさいという意味です。だからヨセフは迷いという眠りから覚め、信仰に目覚めたのです。ヨセフは夢で聞いた神の言葉を単なるまぼろしとして片づけませんでした。その夢にかけたのです。別の言い方をすれば、ヨセフは神の言葉によって、自分の決心をひっくり返し、勇気をもって前に向かって歩き始めたということなのです。人生は決断の連続です。決めなければ前に進むことは出来ません。でもなかなか決められないのが私たちです。人間の正しさや善意では、「**現状維持か後退**」するだけです。そんな時、前に進む力と勇気を与えて下さるのが神の言葉なのです。ヨセフは「**決心した**」のです。神の言葉と一つになって歩き出したのです。

## ③【神はあなたと共におられる】

マタイはこの出来事が、イザヤの預言書に書かれている「**見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。**」(イザヤ 7:14) という預言がイエス様によって実現したのだと解釈しました。その昔、アラム・北イスラエル同盟軍が攻めてきてエルサレムの町を包囲した時、ユダの国のアハズ王に預言者イザヤはこう神の言葉を伝えました。「**神が必ずエルサレムを守るから安心していなさい。何かしるしを求めなさい。**」しかしアハズはこんな状況なのに神など信じられるかといってしるしを求めませんでした。そんな不信仰なアハズに対し、神は一方的にしるしを与えたのです。それが「**おとめが身ごもって男の子を産む**」というものでした。同じようにマリアが身ごもってイエス様を産むことが、神がこの世界を守り、救うこととしるしだとマタイは言うのです。人間が神を信じなくても、神は一方的にイエス様をこの世に送って、必ずこの世を守るといいます。イエス様の誕生はそのしるしなのです。このインマヌエルというのは「**神はわれわれと共におられる**」という意味です。あなたが信じようと、信じまいと、神はあなたと共にいるのです。あなたが罪を犯しても神はあなたと共におられる

のです。私たちが死んでこの世から消えても、神は私たちと共におられるのです。私たちはこれをなかなか信じられません。神が自分の体の中に住んでおられる、神が私と共に人生の旅路を歩んでくださっている、何があっても神は私と共におられる、ということがなかなか信じられません。奇跡的なことが起こったり、物事がうまく行ったり、問題が解決したりしたら、神はわれわれと共にいてくださると思いますが、何も変わらず、状況がどんどん悪くなり、問題が次から次へと起こると、神に見捨てられた、神は怒っているのではないかと、すぐ疑います。でも考えてみたら、今日まで多くの罪を犯して来たのに、それでも私たちは信仰がなくなりません。これは私たちの正しさや立派さを超えていることではないのでしょうか。私が神を信じる前に、神が私を捕らえていて下さっているということなのだと思います。だからもっと神を信じ、神に委ねてもよいのだと思います。

●クリスチャンの精神科医である工藤信夫先生の本の中にこんな記事が出てきます。「人間はなろうとする存在(強くなろう、偉くなろう、立派になろう)であるが、される存在(強くされる、弱くされる、信心深くされる)こそ、人間の本来性ではないかという意味のことを述べているが、この発想は元はといえば、「された」謙遜には痛みと悲しみが伴い、「なった」謙遜には高ぶりが伴う、と教えて下さった金田福一先生の影響が大であった。金田福一先生が私に遺して下さったものは、キリスト教信仰とは「する世界」ではなく、「される世界」である、という確信である。…」「福音とは何でしょう。生きておられる主イエス・キリストが、いつも私と共に居て下さるということをお前提として、そのイエス様が「して下さる」「させて下さる」「与えて下さる」の三語に尽きると思います。パウロが繰り返し恵みと言ったのはこのことです。」

信仰とは非常に受け身的なものです。神に一方的に選ばれ、信仰が与えられ、共におられ、変えられ、動かされるのです。私の人生も顧みたら、一本のレールの上をすーっと歩いてきたように感じます。仕事も自分がしたというより、与えられた、させられたものがほとんどでした。そこでは肩の力を抜いた素直さと従順さだけが元められているようです。自分の正しさも必要ない、清さも必要ないのです。一生かかって私たちが「神がこんな私と共にいてくださった」ということが、見えてくること、それが大事だと思います。「神はわれわれと共におられる」天国は共にいて下さる神が見えている人が住まう場所であり、地獄とは共にいて下さっているのにその神が見えていない人が住まう場所なのです。モンテスキューは「真に偉大なものは人間の上にあるのではない、人間と共にある」といいましたが、キリストの偉大さは遥か天に在ることではなく、私たちと共なる神(インマヌエル)として世の終わりまで罪人のもとに留まり下さることです。「神はわれわれと共におられる」人間と共におられる神に驚きます。この世界と共におられる神に驚きます。